劇団仲間情報誌 No.19

STEP UP

発行元　劇団仲間
劇団仲間情報誌 No.19
2005年5月9日発行
164-0011 東京都中野区中央2-54-10
Tel 03-3368-4623　Fax 03-3368-6181
http://www.gekidan-nakama.com
E-mail:info@gekidan-nakama.com
編集責任者　三橋　怜子

見えない友達

作　/アラン・エイクボーン
訳　/出戸　一幸
演出/亀井　光子

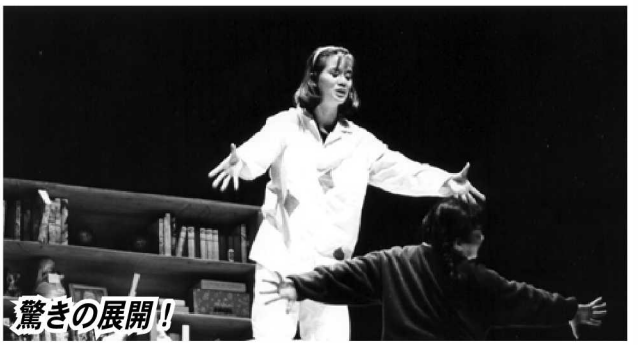
◆あらすじ

ルーシィは、おませで元気な女の子。ある日学校の水泳選手に選ばれ、大はしゃぎで家に帰ったのだが、父のウォルトはテレビの前で居眠り、母のジョイは台所でぶつぶつひとり言、兄のゲーリィは音楽に夢中で、誰もルーシィの話を聞こうとしない。怒ったルーシィはいつものように、〈想像上の友達〉ゼアラに話しかけることにした。その晩、外は嵐。停電の中で階段を踏み外したルーシィは、頭を打って気絶してしまう。気が付くと、そこに見知らぬ少女が立っていた。彼女は誰も知らないルーシィの秘密を次々と話し、自分はゼアラだと言う。

ルーシィは驚いたが、とうとう本当の友達ができた、と大喜び。

次の日の朝、お父さんにひどく叱られて腹を立てたルーシィに、ゼアラはささやく。「そんなに気に入らない家族なら、消してしまえばいい。」ルーシィはゼアラに言われた通り、「消えろォ！」と叫んだ。すると、みんなどこかに消えてしまい、代わりにゼアラのお父さん、お兄さんが現れ、四人で一緒に暮らすことになる。優しくすてきな〈新しい家族〉ができ、楽しい生活を始めたルーシィだったが、次第に歯車が狂い始めてきて・・・。

笑いの渦！


驚きの展開！

そして…！

初演（1994年）の舞台より

三作品連続公演

●東京芸術劇場　小ホール①（池袋西口）
公演日・2005年7月29日（金）～7月31日（日）
料　金・4,000円（全席指定・消費税込み）
前売り開始・5月23日（月）

見えない友達

公演日	開演時間		
7月29日（金）			18：30
7月30日（土）	11：00	14：30	
7月31日（日）	11：00	14：30	

☆特別優待日 7月29日（金）　4,000円→3,000円

●東京都児童会館（渋谷）　料金・前売り 3,000円　当日 3,300円（全席指定・消費税込み）　前売り開始・5月23日（月）

モモと時間どろぼう

公演日	開演時間	
8月2日（火）	14：00	
8月3日（水）	14：00	

ふたりのイーダ

公演日	開演時間	
8月4日（木）	14：00	

見えない友達

作／アラン・エイクボーン
訳／出戸 一幸
台本・演出／亀井 光子

八年ぶりの再演

―最高に楽しい舞台―

座談会

出席者

菊地　勇一
二瓶　美江
安田　由美子
松野　方子

亀井　光子

美術／高田　潔
照明／石島奈津子
効果／射場重明
衣裳アドバイザー
／松井眞由美
舞台監督／三宅　博
制作／小田芳信
　　相元かおり

■：初演は一九九二年七月、神戸で幕を開けてから一九九七年十月までの六年間、年を重ねるごとに支援してくださる方が増えていった作品『見えない友達』その舞台を支えてきた方々にお話しを伺いました。

■：前回演ってみて、お客さんの反応から感じられたこと、思ったことなど色々とあるかと思いますが…

菊地：あんなに客席がわいて、笑ってくれるとは思わなかった。びっくりした。ある程度は、うけるかなと思っていたけど。嬉しかったねえ。

亀井：総力だったんじゃない？子ども向けの芝居で手抜きがなかったっていうのは、子どもだけでなく大人もビックリしたんじゃないかな。

安田：歌や踊りが多い芝居が続いていた中でセリフだけの芝居だったから、うけるのかどうかすごく不安だった。特に自分はセリフの多い役だったから、もつのかなぁと…。でも、小学校の低学年から、高校生、大人までどこに行っても楽しんでもらえたっていうのは、すごく嬉しかったし自信になった。ちゃんと芝居をすればお客様はついてきてくれるんだって、お客様に助けられるっていうのはあったなぁ。

亀井：出演者が回を重ねるごとに、観客がいるということを再認識できた。投げっぱなし、与えっぱなしではなく観客とともに進行していてどんどん素敵になっていった。

菊地：客席の大人も子どもたちも、「あ、うちのパパと同じだぁ」って共感して笑ってくれた。こっちが笑わせようとしているわけじゃなくて、共感して笑う。それは、エイクボーンさんがきちんと書いていてくれるから。変に笑わせようとしなければしないほどいい。

二瓶：演っていて楽しかったよね。演れば演るほど楽しい芝居ってなかなか少ない。

松野：当時は分からなかったことも今なら分かるなって思う。演れれば良かったなって思う。

二瓶：そこで思うのは、今度再演するから絶対良い芝居にしたい。あの時のダメ出しを今の自分はクリアできるか、すごくプレッシャー。

安田：あの時わからなかったことも今ならわかるとか、出来なかったことにまたチャレンジできるのはすごくラッキーだなって思う。足りなかった部分を埋めていけたらなと思う。あの時ピュアだった部分が時を経て無くなっているかも。でも、ピュアさを持ち続けたい。今やって「あの子、劇団ひまわりの子だよね」とは言われないだろうし。（笑）でも、そうなれたら役者冥利に尽きるなぁ。

亀井：それぞれに凄い体験をさせてもらえる。あの時とは世の中も変わったでしょ。世紀が変わったし、日本の状況も、ヨーロッパの状況も変わった。教育もコロコロ、ゆとり教育だって言って、ダメだったって成果主義に変わっていく。子どもにとって、大人にとってピュアなことって何だったのかを再確認しながらやっていくと良いと思う。

安田：新しい発見が出来たらと思う。後は日々体力作りですかね（笑）。

松野：初演は一生懸命やることだけ。亀井さんからのダメ出しもやれていなかったのではと思う。変な気負いがあったせいで、他の役者と対等にぶつかるのに時間がかかった気がする。後半になってやっと相手とのやりとりが出来るようになったかなと思ったら終わってしまった。もう少し出来たかなって思う。

菊地：最後のシーンで毎回泣きそうになった。歳をとってしまったから、そういう気持ちをもっていられるか、それを頼って楽しんでやっていきたい。

松野：ファミリープレイって言葉が素敵だなって思ったんです。

■：やっぱり家族で観て欲しいですか？

二瓶・安田・松野：家族で観て欲しいね。

二瓶：お父さんも一緒に観て欲しい。

菊地：お母さんと一緒にというのはよくあるけどね。

松野：今は菊地さんの演じるお父さんのように寝てばかりというよりは、仕事でいないということの方が多いかもしれない。

安田：朝早く出て、夜遅く帰ってくるとかね。

二瓶：何日も顔を見てないとかもあるみたい。

亀井：朝食も起きる時間ごとにばらばらだった

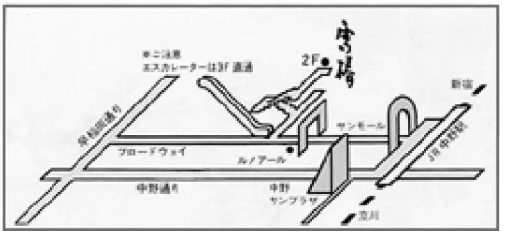
▽1994年厚生省中央児童福祉審議会特別推薦　▽1995年東京都優秀児童演劇選定優秀賞

劇団仲間を応援します！

新潟の郷土料理の店　寄楽

中野区中野５－２５－１５
中野ブロードウェイ２Ｆ
TEL　０３－３３８９－９５９５

●営業時間
AM11：40－PM9：00
●定休日　毎週水曜日



りするし…。ルーシィはいつもぶつぶつ文句を言っているが、それすらも出来ない子の方が問題を多く抱えているかもしれない。その方が、子どもらしさを失っている気がする。

安田：心にすきまをもっている人の何かを埋められれば、何かに響くものであれば良いなと思う。

亀井：ゲームなどの機械とかしかコンタクトできない、そういうことが末恐ろしい。ルーシィのように「見えない友達」をもっている方が、ファンタジックで素直だと思う。どの世代にもルーシィのような夢見る子はいた。それが異常でもなんでもなく、成り立っていた。

安田：他者の意見を受け入れる、自分の意見と違ってもそれはそれでありと認めることが出来ないのはなぜか…。自分も他人も受け入れるにはどうすれば良いのか。今の子ども、親にも提示できるんじゃないかな。

二瓶：色々なことを考えられる芝居。

松野：何かあった時相手が悪いと思いがち。でも、本当は自分に非があるのかもしれない。そういうことを思える芝居。

二瓶：なかなか気づかないよね。でも、振り返ってみると自分に非があることが意外と多い。

安田：観ているお母さんも、子どもの話をちゃんと聞いてあげていないなぁっていうのを思い出すって、感想が多かった。今でも、充分通用するテーマですよね。

■：亀井さんとは一九八六年チェーホフ作・デュラス台本『かもめ』公演以来、多くの作品の演出をお願いしていますが、仲間で芝居を創ることの意義をどうお感じになりますか

亀井：自分が面白いと思った企画に賛同してくれることがとても嬉しい。自分のところ（俳優座）では児童青少年演劇はやらない。でも、自分の中には子どもや女性問題（フェミニズム）そういうものに関わっていきたいというのがある。だから、仲間でやれることは嬉しい。俳優座からの流れもあって、意志の疎通がしやすい、通じるものがある。それはとてもよいこと。付き合いが長いから、仲間の役者が歳を経ていく様を見ている。それを観れるのは自分の携わる芝居以外でも、嬉しいし楽しい。

■：新しく配役された三人に期待することは…

二瓶：前にやっている自分たちが弊害にならないようにしたい。さらで入って来る三人と一緒に創らないと。

亀井：前と同じ事はやりたくないから、前回出演している人達の方は新しいことをやらなくちゃならない。三人の方がむしろ元気なんじゃないのかな。言われたことをやるだけでなく、それ以上のものを目指して欲しい。

松野：菊地さんや二瓶さんのようなベテランと、ここまでからめる芝居はあまりない。

亀井：だから、勉強になると思う。

安田：自分たちにも彼らにも勉強になると思う。前回の一番最後の稽古で、「最後の稽古だから

といって流してやるな、嘘の芝居をしてはいけない」と、六年もやっても凄く丁寧にダメ出しをしてもらえた。なかなかそうしてくれる人はいない。今度はそれを自分たちが彼らに見せていけるようになりたい。

亀井：こうなったら、しったかぶり・やったふりは出来ない。緊張感のある稽古場になるねぇ。

一同：爆笑

■：この後は当然のごとく酒宴、口調もがらりと変わりすごくリアル、こっちの会話を録音すればよかった！なんてね。皆様お楽しみに！

☆「見えない友達」五組一〇名様をご招待！

観劇を御希望の方はハガキに郵便番号・住所・氏名・年齢・電話番号・職業（子ども劇場・おやこ劇場その他鑑賞団体に入会している方は団体名をお書きください）を明記の上、観劇希望日を書いてお送りください。当選された方には、七月五日迄にご招待状を郵送いたします。

※〆切六月二十四日消印有効

〒一六四－〇〇一一　東京都中野区中央二－五四－十

▼　劇団仲間「Step up」プレゼント係

キャスト

菊地勇一/ウオルト

二瓶美江/ジョイ

安田由美子/ルーシィ

松野方子/ゼアラ

新堀創世/フェリックス

平本隆詞/ゲーリィ

大門裕明/チャック

ZERO キッズの
ミュージカル
☆第14回音楽教育振興賞受賞

Space ファンタジー
そらのふ・し・ぎ

2005年
12/3（土）/4（日）
なかの ZERO 大ホール

こどもたちのイマジネーションから生まれたミュージカル（2003年初演）今年はさらにバーションアップして再演！
★連絡先：特定非営利活動法人 ZERO キッズ　03-5385-9068　URL　http://www.c-c-cnet.org

モモと時間どろぼう

原作／ミヒャエル・エンデ　訳／大島かおり（岩波書店刊「モモ」より）
脚色／小松幹生　演出／香川良成

カシオペアの『旅行けばー♪』

富山 早苗　-九州事前交流会+ワークショップ-

川沿いに、満開の桜。土手にびっしり咲いた菜の花が、私を迎えてくれた。私は今、九州、福岡の飯塚市にいます。5月に『モモと時間どろぼう』を観る前に、子ども達（小4～高校生）を中心にワークショップをして欲しい、という鹿児島県子ども劇場協議会の藤さんの熱い思いに動かされて、「やってみよう」と思った、いや思わされてしまったわけなのです。そこで、全てとはいかないけれど、このワークショップを日記のように綴ってみようと思います。

4月6日（水）晴れ、夕方になって子ども達がワイワイ言いながら会場に集まってきました。まず、自己紹介をしました。順にみんなにもしてもらいました。何をするのか楽しみです、という子もいれば、照れてなかなか言葉にならない子もいました。ところが、20分、30分、時間が多くのことを解決してくれました。帰り際には、「最初は恥ずかしかったけどだんだん大丈夫になりました」、としっかり私に感想を伝えてくれました。子どものやわらかい感性を発見した日でした。飯塚にて。

4月7日（木）曇、今日はお茶室が会場です。大人と子ども半分ずつぐらい、計25人集まりました。中でも、制服姿の中学生男子8人は、大人と対面に座らされてモゾモゾ、ボソボソ仲間同士で何か話していました。座が盛り上がってくると、彼らの中から次々と新しい発想が飛び出してきました。大人も負けじと必死です。最初は、小さかった輪が、彼等のパワーによっていつしかとてもお茶室とは思えない、熱気あふれる大きな輪になっていました。自由な発想がいっぱいの遊びの時間は、とても心地よいものでした。鹿児島にて。まだまだ続くー♪

新しい出演者を紹介致します。

浜谷真理子
マネージャー

咲間まみ
リリアーナ

★咲間まみさん（ビッケさん）
おませな女の子から腹に一物抱える婆の役まで、何をやらせても役にはまり、演じきってしまうビッケさん。この度、ニノのおかみリリアーナとしてモモ班に帰って参りました！今回はどの様に料理してくれるのでしょう？決して妥協を許さないビッケさんだから、毎日あれこれ手の内を変えて責めてくるんだろうなぁ～?!
旋風を巻き起こして私達に刺激を与えて下さい!!

鶴田まや
モモ

★鶴田まやさん（まやちん）
まやちんは生真面目。やるべき事は絶対やり遂げ、課題を与えられれば次までには必ずこなそうと努力する。全てを一日で完璧にしようと頑張りすぎて、がんじがらめになって頭から湯気を出していることもしばしば。もっと大らかに構えていいのヨ!!四角い枠に捕われないで、まぁるく柔らかな存在でいて下さい！
私達はそんな『まやモモ』について行きますから!!

坂本葉子
クラウディオ

★坂本葉子さん（ハコちゃん）
昨年四月に入団したフレッシュな二年生。しかしハコちゃんは新人とは思えないくらいの落ち着きと貫禄?!を兼ね備えています。モモの本番では、未だにバタバタ慌てている先輩達を尻目に淡々と準備を済ますハコちゃんの姿が。そうかと思えば、稽古中慣れないカツラを吹っ飛ばし、恥ずかしそうに顔を真っ赤にして拾っていたなんていう場面も。そんなお茶目な一面もたまには見たいな。

あなたモモの話し知ってますか？

▽1993年年度東京都優秀児童演劇選定優秀賞受賞
▽1994年度文化庁芸術祭賞受賞
▽2004年度児童福祉文化賞（舞台芸術部門）受賞
▽2005年度本物の舞台芸術体験事業指定作品

Time is Life ―盗まれた時間を取り戻せ―
公演回数1000回突破！

劇団仲間を応援します！

時　間　貯　蓄　銀　行

－ 豊かな暮らしを実現するために －

住所　不定　私はいつもあなたのすぐそばにいます

人より成功するために
無駄な時間の浪費を止めましょう
競争社会のなかで、
生き残るために！
Time is money！

青い図書カード

原作／ジェリー・スピネッリ
訳　／菊島伊久栄（偕成社刊）　脚本・演出／藤井清美

『青い図書カード』を選んだ視点

静岡おやこ劇場運営委員長　小泉京子

最近出会った作品（チョコレート戦争・おにの捨六）から、劇団仲間の実力あるストレートプレイに対する期待も高く選ばれました。

「大人の入り口、肉体的にも精神的にも急激に変化していく思春期にさしかかった二人の少年を軸に有り余るエネルギーを抱えながらそのやり場、活かし方に悩む子どもたちのリアルな日常を描いている」という作品内容にまず興味が沸きました。

「子どもたちが出会うのに適した舞台」よりも「子どもたちが出会うに値する舞台」という脚本家藤井氏の言葉にも魅力を感じました。親である私たちは「青年」には戻れないけれど、「限界を知りながらも人間の持つ可能性を信じている」青年こそが大人の入り口でぐずぐずしている少年たちを呼び込むことができる、ということを舞台で観てみたい、そしてそんな気持ちをもっていられたらと思いました。

劇場の高学年の子どもたちと同年代の少年が主人公というところで子どもたちが（中でも男の子に見応えがあり）共感できる、高学年の目線に合う作品ではと選ばれました。実際子どもたち自身からも観たいという声が上がりました。親としての思いでは「舞台に登場する〈子どもたちに出会わせたい大人〉を観たい」「思春期の子どもの内面、揺れを観たい」という声があげられました。

実際に観たあと、ウィーゼルのことばにできないイライラした気持ちや大人と子どもの心のアンバランスさがとてもよく伝わってきました。友だちって何なのか、自分にとって「青い図書カード」は何なのか、考えさせられる作品でした。又、上記の視点がしっかり表現されていた作品でした。

私は、事前に東京でも観ましたが、二回目という感じは無く、毎回違う四人に出会えそうで、きっと何度でも観ることの出来る作品と思いました。派手ではありませんが忘れられない作品の一つになるでしょう。

個人的には「大変なことは悪いことではない」という車椅子の青年の言葉が心に残りました。

思春期の様々な葛藤の中で

『万引きした二人の少年が逃げる』
この芝居はそこから始まる！

新生青い図書カード発進！

田中　誠

小糸（マミー）いずみに代わり、ブレンダ役にハコちゃんこと坂本葉子を迎えた新しい図書カード班が三月二十七日、小田原にて産声を上げました！いやー、それにしても長い稽古だったなぁ、一月からの三ヶ月間にスケジュールの都合で実質一ヶ月足らず、印象としては初演より多くの稽古をした感じでした。おかげさまでハコちゃんは単なる代役ではなくオリジナルのブレンダ像を掴むことが出来たのではないのでしょうか。パチパチ。残る三人の出演者達も果てしない欲望を持つ演出家（笑い）藤井清美さんのもと、同じところに立ち続けることは許されませんでした。それぞれに新しい発見を得て役に厚みをつけちゃいました！なんて自画自賛も許して欲しい苦闘の日々ですハイ。さて、新図書カード班初日の小田原、しかもいきなり２ステージ！無事に済むかと思ったら全然無事ではありませんでした。まずは藤井さんからのダメ出しで「芝居が伸びてる」と。たぶん稽古で思いが深まったぶん、表現しようとしすぎて必要以上に間が延びてるんじゃないかと。一同ショック。さらにマングース役の冨田章二が芝居中フェンスに足をぶつけて痛がっていたが、その後すねにヒビが入っていることが判明！次の静岡公演は六日後なんですけどー!!

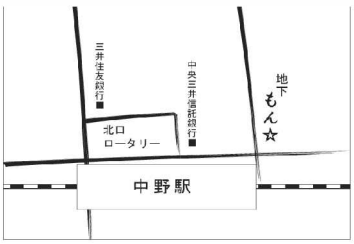
そんなこんなで迎えた静岡公演、テーマはスピードアップ。「ついてこられるものならついてこい」、を合い言葉に章二は無理をしない様にって、幕が開くとマングース、走る走る、とても足にヒビが入っている人間には見えません。そして芝居の結果は？もちろん自画自賛でございます。

田中　誠
（青　年）

劇団仲間を応援します！

地酒とワインのスローフード　もん

住所：東京都中野区中野5-32-9　日本通商ビル地下1階　TEL:03-3388-4567



ふたりのイーダ

原作／松谷みよ子（講談社刊）　脚本／宋　英徳
演出／鈴木龍男

▼繊細なアンサンブルを創り上げる演出家、鈴木龍男氏の魅力を、『カモメに飛ぶことを教えた猫』の脚本を担当していただいた、いずみ凛さんに伺いました。

『出 会 い』

いずみ　凛

演出の鈴木龍男さんと初めてお会いしたのは、劇団仲間の舞台を観たあとだった。ずいぶんいろんな人たちが観に来ており、舞台のあと、おおぜいで飲みに行ったのをおぼえている。近くに座ったわたしたちはお互い神妙な顔で自己紹介をした。今思うと笑ってしまうが、初対面だったわたしはなぜかかなり緊張して、用心深く距離をとっていたような気がする。

その後、やはりそのとき同席していた劇団道化のおしごとで、わたしは龍男さんとご一緒させていただくことになった。在韓被爆者のことを舞台にしたいという劇団道化の提案に、どちらかといえば逃げ腰だったわたしが、なんとか『ナガサキ・んグラフィティ』という脚本を書きあげることができたのも、劇団の人たち、そして演出の龍男さんのおかげだった。龍男さんは演出家として、共に創る仲間としてじっくりとつきあってくれたのだ。

初対面であんなに硬くなっていた自分が不思議なほどだ。創造面においての緊張感はきっちりと持ちつつも、龍男さんはとても気さくで、威圧感を与えない人だった。先輩というよりも、信頼できる「仲間」という気分にさせてくれる。けれど、実際には年齢も経験もずっと上で、知識も豊富な龍男さんを、わたしは何かと頼りにしてしまうのだ。こんなふうに龍男さんを頼りにしている若手が、いろんな劇団のあちこちにいることをわたしは知っている。

龍男さんと一緒に仕事をすることになったとき、制作の小田さんが「うち（劇団仲間）は出会いの場だから」と笑っていたけれど、仲間という劇団にはいろんな人をつなぐ、ふしぎな力があるのかもしれない。近い時期に『ふたりのイーダ』、『カモメに飛ぶことを教えた猫』という別々の作品で劇団仲間と関わり、そのあと、一緒に仕事ができたというのは、とても幸せな出会い方だったと思っている。

このんこんなん
舞台の顔／普段の顔

松野方子
（母）
小野瑞穂さんへ

森の中に小さな湖がある。爽やかな風が吹き、透き通った水面は優しい中にもなぜか淋しげである。私はそんなイメージを瑞穂が演じる「りつ子」にもっている。素敵である。普段の瑞穂は礼儀正しく実直で常に芝居の事を考え、彼女ほど勉強熱心な者はいない！

……これだけ褒めたらもういじめない？瑞穂ちゃん？

小野瑞穂
（りつ子）
片桐雅子さんへ

優しくてしっかりしている直樹君の向こうに片桐さんがいる。強くて、逃げたりしない女性。強いって事は時に辛い思いをする事もある。強いって事は弱さも全部引き受けているって事だと思う。私は、ときどきあなたの強さが欲しくなります。あなたの潔さがうらやましくなります。あなたが直樹君のやさしさに満ちているのをみると私は本当に愛おしくなるのです。

片桐雅子
（直樹）
高木恵美子さんへ

あどけない顔で〈お兄ちゃん〉と言われると本当に三才のチビだと思ってしまう。二十代の女性が三才を演じるのは並大抵ではない。フリではなく内側から三才を創造していこうとする姿勢はあっぱれだ。家族の中で一番しっかり者と母の松野さんともよく話す。芝居大好きの努力の人だ。因みに普段も私は〈お兄〉と呼ばれている。

高木恵美子
（ゆう子）
松野方子さんへ

「イーダ」のお母さんは気さくで元気で、まちゃさんそのもの！普段も私達から「お母さん」と呼ばれています。と～っても力持ちで男性の中に入って、バリバリ仕事するかと思えば、日舞が上手で、慎ましやかな一面も…。適当よ～！と言いながら実はすご～く気にしてるんだから！困った時になにげなく手を差しのべてくれる気遣いは最高！感謝!!

笑いと感動を生む、アンサンブル

子どもたちは笑いながら劇中に引き込まれていく

ー夏休みのある日、直樹とゆう子は
言葉を話すふしぎなイスと出会うー

東京都児童会館 8月4日 14:00開演

劇団仲間を応援します！

劇団 能代小劇場
代表 佐藤長俊

1991年に発足。能代小劇場は毎年定期公演を行っています。
昨年、金子洋文作「鬼の面」を小坂町「康楽館」にて公演。
大好評につき今年9/3(土)湯田町. 銀河ホールにて再演決定!

秋田県能代市砂留山55-11 【石の】メモリーようぶん㈱内 伊藤洋文・今立善子 tel.0185-52-6400

カモメに飛ぶことを教えた猫

原作／ルイス・セプルベダ　訳／河野万里子（白水社刊）
脚本／いずみ凛　演出／菊池　准

前田 承生
『マチアス』

「サル、サルと言われても…」

オレがいつからバザールで口上をやっているのかは、オレ自身もよく覚えがねえなあ。
気がついたらやっていたんだよ。
毎日、毎日ビール飲みながら、聞いてくれる人もなくやっているうちに、色々人間のおもしろいこと、くだらないこと見たり聞いたりしてるって訳だ。
そんな昔の事はよくは知らねえけど、近ごろの人間はどうしちゃってるんだろうねえ。
ま、毎日生きていくのが大変なんだろうけど、そんなにあくせくすることないんじゃないのって言いたくもなるよ。
二、三人で歩いていながら、たぶんそいつらは友達かなんかなんだろうなあ、お互い話もしないで、そら、あの近ごろ皆が持っているケイタイ、って奴か、一人ひとりがそれぞれそいつにはなしかけたり、そいつを見ながらボタンを押したりしてるんだぜ。変だろ。
人間の「こみゅにけーしょん」てのはどうしちゃったんだろう。
オレは時々時間があると海に行ってタンクをかついで潜るんだけど、魚は種類が異なっても例えばサメとイルカでも何でもない時はいつも一緒にいるんだぜ。きっとちゃんと「こみゅにけーしょん」があるんだろうなあ。
せっかく言葉が有るんだからもっと直接話したり聞いたりした方がいいんじゃねえかと思っている「サル」がここに一匹いるんだよ。
おっと、お客だ、口上、口上と。

小林 利也
『詩 人』

「詩人に思うこと」

「詩人ていうのはー。」意識してるわけではないのに、そう演じている自分にある日気がついた。
「詩人て分かりにくいですね」そんな言葉を聞いた時のことだ。わかってほしいと演じれば演じるほど自分が苦しくなっていく。
そんな時菊地勇一さんから『三好十郎の作品で、花を造る人の役を頂いた。いい肥料を作るため肥溜めを毎日かき回さなければならなのだが、演出家から「君の芝居から、肥溜めの匂いがしない」と言われた。何日も臭い、嫌な顔をしながらかき回しているのに一考に0・Kがでない。どうして…？
考えたすえに肥溜めを慈しみながらかき回してみると、やっと演出家から「ん、匂いがみえた」といわれたよ。』…自分の仕事を慈しみながら、愛情を持って向き合うとその役の精神や生きざまがみえてくる。そしてそれが見る側に匂いまで想像させる…結果を演じるなということなのか…
私はこの話から本当に自分がやらなければならない事が朧気ながら見えたような気がした。思想や精神・生きざまが身体をとうして言葉になり、詩になっていくーそれが詩人なのか？！
体現することは難しいけれど、所詮44年間の人生経験しか無いわけであるから44歳なりの生きざまを詩人に込めたいと思う。

飛ぶにしろ飛ばないにしろ
決めるのはおまえだ

異なるものを認めたり愛したりすることはとても難しい。
でも僕らにはそれができるようになった。

▽2001年 東京都優秀児童演劇選定優秀賞　▽2005年度本物の舞台芸術体験事業指定作品　▽2005年度児童福祉文化賞推薦作品

劇団仲間を応援します！

ワダケンサービス
-ハウスクリーニング-

185-0013　国分寺西恋ヶ窪3-14-21　TEL 042-359-0381　携帯 090-9313-3990

一般家庭のハウスクリーニング
キッチン・浴室・絨毯、等
事務所・店舗
業務用、中古・新築
お気軽にご相談ください。

劇団仲間53年の歩み

仲間と私

加藤　衛

「劇団『仲間』？ああ、あの児童劇団か」

といった言葉を、時に、耳にすることがある。「ああ、あの児童劇団か。」という表現には、かなり軽蔑的な意味が、こめられているようだが、わたしは、わたしなりに、これは、「仲間」にとっては、名誉ある表現と、受けとっている。この国には、ほんとうの意味で、「児童劇団」と呼んでいい劇団は、ほとんど見当らないからだ。

「仲間」が、その数少い、名誉ある、「児童劇団」の一つであることは、たしかだ。

名誉ある、といったのは、こどもたちにこそ、きちんとした芝居を提供しなければならないし、それはおとなの責任であるし、そういう芝居を、コンスタントに提供できる力をもっている、そして、それぞれの「誠実さ」をもっている劇団こそ、「児童劇団」と呼んでいいからだ。

こどもにお芝居ごっこをさせている劇団、こどもなら、どんな芝居だってかまわない、とでも思っているように、ほとんど俳優としての訓練を経ていない役者をつかって、その時その時をごまかしている劇団はある。観客動員　――動員とは妙な言葉だが、「こども」の芝居の場合には、「こども」たちが、自分で積極的に選ぶということは、ほとんどないから、「おとな」たちに、動員されることになる――　は、「こども」たちを動かし得る「おとな」たちをつかまえておけば、容易に行われる。芝居としてどうにもならないようなものでも、その辺のかけひきがうまければ、お客は呼べることになる。というようなことで、劇評家も本気で「児童劇」を劇評の対象とすることがあまりない、といった事情もからんで、眼に余る「児童劇」が、はびこることになる。

「仲間」が、これまで、劇団創設以来、そのエネルギーの半ばを、児童劇にそそいできたのも、この日本という国に、おとなの責任において、ほんとうの「児童劇」を、こどもたちに、日常的、提供する義務を感じているからだ。

このことは、「おとな」の芝居の場合も、変りはない。第一回試演会に、ギュンター・アイヒ「夢」の拙訳を提供して以来、わたしと「仲間」との関係は続いている。

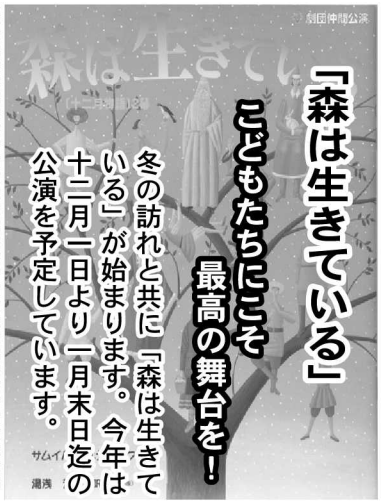
「仲間」とのつきあいは、わたしの眼を、世界演劇に向けさせてくれたが、十年以上に及ぶそのつきあいは、これからも変らないだろうし、従って、これからもわたしの眼は、世界演劇に向けられ、ますます、世界各国の芝居の紹介に、わたしは精力をつかいたいと思っている。わたしをそうさせたのは、何といっても、はじめに書いたように、「仲間」が、児童劇に対してと同じように、おとなの芝居にも、「誠実」に、向いあっているからだ。わたしと「仲間」とを結びつけているものは、この芝居に対する「誠実」な態度、といっていい。

＊第十七回公演・一九六三年五月
「道は暗い」公演パンフレットより抜粋

【加藤　衛】一九五二年「横浜演劇研究所」を設立。加藤氏の持論である「演劇の日常化」を、研究所を母体にして実践。さまざまな業績で日本演劇界の底辺を築く。一九九二年三月十九日逝去・享年七十七才。

「パンとご飯」＋ワークショップ

ドイツの劇団THEVO＋劇団仲間　日独共同プロジェクトHAND公演　「パンとご飯」八月十七・十八日「しもきた空間リバティ」にて公演決定！前売り開始は五月です。ワークショップは七月二十五日、渋谷児童会館・八月二十二～二十五日、劇団仲間稽古場にて開催！ご応募お待ちしています！



編集後記

編集責任者　三橋　怜子

♪あああ、忙しい！
あれも、これもと立て込んでいる仕事をこなすうちにあっという間に時間が過ぎている、編集部にとってはそんな一ヶ月でした。皆様も同じかもしれませんが…。
これも、時間どろぼうの仕業なのでしょうか。面白い芝居でも観に行って、盗まれた時間を取り戻したいものです。
7月には8年ぶりに、『見えない友達』を再演いたします。家族、友達、様々な面でコミュニケーションが希薄になっているといわれる現代。楽しんでいただくことはもちろん、色々なことを見つめ直すきっかけになればなぁと思います。
ぜひ、ご家族揃って観にいらして下さい。
今年も、3人の新人が入団しました。彼らの若い勢いに負けぬよう、頑張っていきたいと思います。
今後とも劇団仲間をよろしくお願いいたします！